

西東京市

市民の戦争体験記

(三)

目次

発刊にあたって

1

戦災体験（烏羽文子）

3

私の戦争体験（金丸幸世）

6

『15才の海軍特別年少兵』より（西崎信夫）

8

第三集 発刊にあたって

『西東京市 市民戦争体験記(三)』を発行いたします。

『戦争体験記(一)』を二〇〇九年に発行し、六名の方の体験記を掲載しました。また『体験記(二)』を二〇一〇年に発行し、八名の方の体験記を掲載しました。続いて二〇一一年に『体験記(三)』を発行する予定でしたが、体験記の原稿の都合で今年(二〇二二年)の発行となりました。

今回は三名の方の体験記の掲載となりました。

『西東京市 市民の戦争体験記』の発行はこの第三集をもつてとりあえず終りといたします。

あの戦争が終つてから六七年がたち、体験された方は少なくなりました。再び戦争を繰り返さないために、『西東京市 市民の戦争体験記』が役に立てばと願っています。

すでにこのような戦争体験記は、田無市及び保谷市の時代にも公民館や図書館、市民グループ、労働組合などからも発行されております。全ての冊子は、みな平和な世界を築いていくために、「戦争体験を後世に伝えよう」と積極的に取り組み、冊子として残されました。

以下の冊子は西東京市図書館に所蔵されております。

是非この『西東京市 市民の戦争体験記』と合わせて、手に取ってお読みください。

発行年	書名	発行者など
一九六九年	『原爆の記』	指田吾一(旧田無市長)著
二〇〇七年	『原爆の記』	を広める会より復刊
一九七二年	『保谷の被爆記』(体験談三三名)	発行：郷土誌「保谷」発行会
一九七七年	『戦争 生き抜いた私たち 寿講座生の手記』(体験談二七名)	発行：田無市立中央公民館
一九七九年	『歴史はとまつてしまつた 原爆投下の地、広島、長崎からの告発』	発行：田無市職員組合
	『中島飛行機製作所と田無 中島航空金属株式会社と田無』	発行：田無市立中央図書館
	『町を護る 空襲下の田無 尾崎藤雄翁手記』	発行：田無市立中央図書館
一九八〇年	『戦争を伝える第1集』(以後一七年間発行される)	発行：田無立中央公民館・図書館
	『中島飛行機と田無 戦争を伝える・座談会の記録』	発行：田無市立中央図書館
一九八二年	『田無の戦災誌』(対談形式により三七名が語る)	発行：田無市立中央図書館
	『五色の日記』	小峰順誉(総持寺住職)著
	『仲間伝える戦争の体験記 二度と戦争を許さないために』	(体験記二一名) 発行：田無市職員組合
一九八五年	『戦時下の絵日誌 ある美術教師の青春』	佐藤多持著
一九八八年	『被爆者のお話と映画の集い』(毎年発行)	発行：核戦争の恐

ろしさを子供らに伝える会

一九九〇年『私達の街にも、戦争があった。』発行：田無第一中学校地歴部

『なつくさ』（以後十年間発行される。体験談を書いた人は合計一二十六名に及ぶ。）発行：保谷市戦争体験をつづる会

一九九二年『21世紀への伝言 私の戦争体験記』発行：保谷市

一九九三年『21世紀への伝言 君のまちにも戦争があった。』発行：保谷市

行：保谷市

一九九四年『田無 非核・平和運動資料集 田無 非核・平和都市宣言

十周年記念』上・下巻 発行：非核・平和をすすめる田無

市民の会、田無市

『戦争体験記』「ほうや公民館だより」（94年9月20日）

『散華乙女の碑』（体験談：九名）発行：武蔵野女子学院

『八つ手の盆 田無の戦争体験を語る』（体験談十五名）発行：平和観音保存会

行：平和観音保存会

一九九五年『21世紀への伝言』（体験談一〇名）発行：平和をみつめる田

無のつどい実行委員会

二〇〇二年『平和を考える講座』その時、西東京市では・中島飛行機と

のかかわりから考える』記録集』発行：西東京市芝久保

公民館

二〇〇三年『だれが戦争をはじめたの？ 小学生からの質問 平和が一

番』発行：村瀬敬子

二〇〇九年『五歳の戦争』（田無空襲体験記横山さよ子著、発行：文芸社

二〇一〇年『戦中日誌類からみた戦時下の武蔵野女子学院』発行：武蔵

野女子学院

戦争体験記は、ここに掲載していないものも多数あります。また他市でも多くの体験記を発行しております。是非いろいろな体験記を併せてお読みいただければと思います。

市民参加ですすめる

西東京市の非核・平和宣言事業

西東京市の非核・平和宣言事業は、市民も参加し企画・立案・実行まで積極的にすすめています。

また、一九四五年四月十二日、田無駅前に一トン爆弾が落とされ多くの人が犠牲になった日を祈念して、この四月十二日を「平和の日」と条例で定め、毎年多様なイベントを開いています。さらに夏には、若い人にも広島、長崎の体験を学んでもらおうと、広島や長崎での原爆慰霊祭へ出席し被爆者の体験などの話も聞く機会を設けてきました。他にも夏休み平和映画会、非核・平和学習会など、年間を通して事業をすすめています。非核・平和事業へのご意見、提案など、そしてご協力いただける方の連絡もお待ちしています。

非核・平和をすすめる西東京市市民の会

西東京市

問合せ：西東京市協働コミュニティ課（電話：〇四二-四三八、

四〇四六）

戦災体験

烏羽文字

学徒動員

昭和十八年秋、私が女学校四年生の二学期、学徒動員令が下り、学業半ばではあったが、戦地に赴く男子に代って動員学徒として軍需工場で働くことになった。

私が働くことになった三鷹の中島飛行機武蔵野工場は、あの有名な零戦の発動機工場だった。

飛行機が一番重要な心臓部を作る大事な仕事である筈であるのに、工場に入って驚いたことに、大方が、徴用された元職人さんや、小学校を出たてのほっぺの赤い訓練工で、指導している班長さんもこれまた、工業学校の生徒だったりで、ほんのひとにぎりの職工さんを除いては、徴用工、訓練工、それに動員の大学生、女学生の素人の心細い集団だった。

こんなことでお役に立つ飛行機が作れるのかしらと云うのが、私たちの実感であった。

事実、工場の中には、あちこちに製品のオシャカ（不良品）の山が積まれていた。

ともあれ、私たちは女学生の制服を脱いで、工場から支給されたカーキ色の麻袋で作られたような上着と

吊ズボンを着用し、日の丸の鉢巻を頭に締めて、出来上がってきたピストンが正確であるかをゲージで計ったり、摩滅した部分を紙に写し取ったりして、お国にご奉公していたのだった。

その頃はすっかり物資が不足していたから、制服は支給されたから良かったものの、履物には困ってしまった。靴を履き潰してしまつてからは、稲垣の伯母が、横浜の野沢屋の閉店時に娘がいるからと、私たちの為に買い溜めして下さった鎌倉彫の下駄を下して履いた。当時はめつたにお目にかかれないうようなこの桐の下駄は、実に履き心地が良かったが、工場迄の砂利道を歩いたり、朝の体操の時はひやひやものだった。

そんな或る日のこと、地下食堂で昼食の最中、突然一階付近で大きな地鳴りと爆破音がした。

B29の一機が飛来して、中島の工場に爆弾を落とすて立ち去つたのだった。

その頃、防空訓練は、街でも、学校でも絶えず行なわれていて、バケツリレーの訓練やら、火たたきで火を消す訓練など焼夷弾への備えは出来ていたが、爆弾への対処だけは、もう防空壕に逃げ込む以外、為すすべがなかった。その時は幸運にも食事時間で、殆どの人が地下に居たので、大した被害もなく済んだ。

しかしその後は、中島飛行機は敵の標的になり、毎日のように爆撃を受けるようになって、仕事に行っている

のか、逃げる為に工場に通っているのか分からないような日々であった。

母は、毎朝、私の後姿を見送りながら、今日もまた無事で帰ってくるようにと念じていたそうである。

昭和十九年十二月三日は、私たち学徒にとって辛い悲しい日となってしまった。その日、私たちは何故か、みんな警戒警報のサイレンが鳴ると、武蔵野女子学院の校庭に逃げ込んだのだった。

あちこち逃げてみたが、やはり学校が一番安全であると思ったのである。

やがて空襲警報が鳴り、B29の爆音が聞こえてきた。私たちは松林の間から頭上を通過する大編隊を見上げていたが、故意か、偶然か、一発の流れ弾が私たちの方へ落ちてきたのだった。

“伏せろ”という声があったが、防空壕まで逃げる間もなく、私はとっさに、目の前の塹壕に飛び込んだ。

私はその頃、毎夜のように、夜になると敵機の襲来に会って、立川の飛行場目がけてシウルシウルと不気味な音を立てて落ちてくる爆弾の落下音を聞いていたが、実際に頭上すれすれに通る音のすさまじさは、表現のしようもない恐ろしさであった。

何台もの重戦車が、大きな砂利の山を踏み砕きながら突き進んでくるような音を立て私の頭上に迫り、ふと音

が止んだ。

私はその音を聞きながら、塹壕にへばりつけるだけ、へばりついて、死のこないことを願っていた。

音が止んだ時、私は“助かった!”と思った。体を蔽っていた枯葉の山を除き、塹壕から上がってみると、私のすぐ側にあった立派な防空壕は跡かたもなく、なくなって大きな穴がぼっかりと出来ていた。

一屯爆弾の直撃を受けて、四人のお友達は壕諸共吹き飛ばされていた。

卒業近い頃、中島の武蔵野工場もまた、全壊した。

朝早く飛来した五百機の艦載機の波状攻撃を受けて見る影もなく崩れ落ちたのである。

私達女学生は、幸運にもまだ登校前であった為、皆難を逃れることが出来た。

しかし、あの可愛かった少年工たちは、朝礼の時刻であったために工場と運命を共にしたのだった。

私達は、その時始めて「本当に日本は勝つのかしら」と禁句であった言葉を囁き合ったものである。

終戦から三十四年目の昭和五十三年に、私達同級生は、当時のことを知っておられる先生のご尽力で、ささやかに、散華した四人の友の供養をして、記念の碑を建てる事が出来た。

武蔵野女子学院も、今は昔の俤はなく、短大、女子大と立派な校舎が建てられて、華やかに女子学生が行きかっていた。

散華乙女の碑に思いを寄せる人が幾人居るだろうか。小さな記念碑は、肩身が狭そうに植木の蔭に、みんなのご迷惑にならないように建っているように見えた。

「もう殆どの先生もご存知ないことですから」と、ご尽力下さった先生の言われた言葉が心にかかった。

作業服に防空頭巾、そして三角巾やら包帯を入れた手製の力パンを肩にかけて逃げ回った日は、遠い昔のことではなかった。

烏羽文子『思えば遠しー我が青春の記録』

(昭和六十一年八月)より

烏羽文子さんの原稿提出にあたって

西東京市保谷町

稲垣幸男

烏羽文子(旧姓：松本)さんは、私(稲垣幸男)の従姉

にあたり、戦争中、武蔵野女子学院に通い、中島飛行機に学徒動員された人である。軍医の父親を戦地に送りだし、母親(私の母の妹)と姉、弟二人とともに、青梅線

中神駅前の自宅で留守を守っていた。

文子さんは、生前、『思えば遠しーわが青春の記録』という小冊子を何部か残されている。私は最近になってその一部を遺族から頂いたが、その中の一節に「学徒動員」があり、「散華乙女の碑」の由来が詳しく書かれている。先日、「西東京市平和の日」のイベントが田無駅北口アスタビルで開催され、パネルの中に「散華乙女の碑」が展示されたのを見て、また、市民の戦争体験記を募集していることを知り、ご遺族のご了解を戴いたので、ここに原稿を提出いたします。

私の戦争体験

市川市柏井町

金丸幸世

私は、戦争中は国民学校の生徒で東京都北多摩郡田無町に住んでいました。両親と出征した兄がいて、女学生の姉と中学生の兄は軍需工場へ勤労動員学徒として行っておりました。隣の武蔵野町には、中島飛行機武蔵製作所という巨大な軍需工場があり、最盛時の作業員は約五万人いたといわれています。

一九四四年十一月二十四日に、第一回目のB29によるこの巨大工場をめぐった空襲がはじまりました。二度B29の通りみちであった田無町も、工場めがけたなぐれだまが、毎回落ち死者がだんだん増えてきました。

ある時は警戒警報もならないのに校庭に爆弾が落ち、少女三人が身体をバラバラにされて爆死しました。

一九四五年四月に入ると、空襲はいちだんと激しくなり死者が増すばかりです。私もいつ死ぬかわからない状況におかれ、疎開した人が羨ましくなりました。食糧難でいつもお腹をすかしていても、いつ死ぬかわからない恐怖でサツマイモも喉に通りませんでした。それでいて、爆死した屍体を見るのも平気になってしまいました。

四月十二日警戒警報がなり学校から帰ると家族は、それぞれ所へ行っていて私一人で本を読んでいます。すると突然すさまじい轟音とともに真っ暗になり、家がガタガタと潰れて、何かわからない大きなものや、いろいろなものがどンドン私の上に落ちてきて、頭をガンと打たれ気を失ってしまいました。どのくらいだったかわかりませんが気がついたら光が少さし、まわりが少しづつ見えてきました。

私は大きな土台石と土台石の間に挟まって埋もれていることがわかりました。ちよつとずれば生命はなかつたでしょう。頭の上にはいろいろなものがのっついていてこれからどうしたら外に出られるか恐ろしくなりました。まわりのものを、力いっぱい動かしても動きません。無我夢中で全身の力で頑張り、何をしたかもわかりませんでした。少し動くところがあって必死になり掻き分け、だいぶ時間がかかったと思いますが、ちよつと外にはい出すことが出来ました。助かったと思つたとたん力がぬけフラフラになって横になりハハハしながらしばらく寝ていました。

ちよつとまわりを見るとお隣が、完全になくなっていました。お隣を見に行ったら家一軒が入りそうな大きな穴があり一トン爆弾の直撃でした。家は跡形もなく、まわりの空地や倒れた樹々に、いろいろなものが潰れて飛んでおりお隣の屍体はみつきりませんでした。

だいぶたつてお隣へ数人の人がやってきました。親類の人たちで、樹々の枝などについているコマギレのような肉片を涙を流しながら割り箸でいねいに取りツボにいられていました。私はいつも遊んでいたお隣のミヨちゃんやんの屍体の一部かもしれないと思い、ワンワンと泣いて涙が止まりませんでした。

こんどは反対の向かいの家を見たら満開の桜の古い木が何本も倒れており、その家も跡形もなくなり、やはり一トン爆弾の直撃でした。

そのうち私の家族がみんな帰ってきたので武蔵野町吉祥寺に一軒借りてあったので家族そろって吉祥寺の家へ行くため、田無駅へ向かいました。あちらこちらで大きな穴ができていて、そこにあつた家は無くなり、潰れた家や瓦礫の山があちらこちらにあり、道はデコボコになっていました。その日だけの田無町の死者は百人以上のことでした。

吉祥寺に行つてから六月に軍需工場で女学生の姉が爆死しました。七月には出征していた兄がレイテ島で戦死したとの通知が来ました。焼夷弾で高円寺あたりまで焼けてきました。こんどは焼夷弾で焼け死ぬかもしれない。私の家族は地方に親類もいないので逃げる所がありません。やっと八月十五日終戦になりました。これでやっと死なないですむのだと思うと、十一才の私に今まで感じたことのない大きな喜びが湧いてきました。

『15才の海軍特別年少兵』より

西東京市下保谷

西崎信夫

一九二七年（昭和二年）生

敗戦の日（1945・8・15）

日本政府は「ポツダム宣言」（軍事主義勢力の除去、連合国軍による保障占領、植民地占領地の放棄、陸海軍の武装解除と復員、戦争犯罪人の処罰、日本の民主化、賠償支払いなど）を、当初は黙殺する予定であったが、八月六日に広島、続いて九日には長崎に原子爆弾がおとされ、さらに、八日にはソ連が不可侵条約を一方的に破棄して満州に侵攻したことから、ついに、ポツダム宣言を受諾し、連合国軍に無条件で降伏した。

真夏の太陽がジリジリと照りつける八月十五日の正午、天皇陛下の玉音放送があるからと全将兵が前甲板に集められ拝聴した。しかし、玉音放送は雑音が多くよく聞き取れなかったが、要は「終戦を告げる紹書だ」と説明があつた。私は日本軍が米英に無条件で降伏するとは到底考えられず、恐らく、陛下は緊迫した国際情勢故一億国民が一丸となって本土決戦に備えよ」と激励の言葉だと解釈した。しかし、居住区に戻ると敗戦の真偽で喧々譁々の議論で、渦巻いていた。翌日になって暗号室の室長から広島と長崎に新型爆弾が落ち多数の死傷者が出た事や

東京が焼けの原になった等を聞くに及んで、はじめて「日本の敗戦」を信じるに至った。

あの日は、頭の中が真っ白になり明日から何をどの様に生きてゆければよいか、皆自分から息詰まるような真空の長い一日であつた。ただ、印象的であつたのは、抜けるような青空と、明日から戦争がないという何とも言えない解放感であつた。

数日後、艦内は流言飛語で人心を失う騒ぎとなつた。下士官以上は全員去勢され、婦女子は米兵に強姦されるなど、正直、私は舞鶴の山奥へ逃亡しようと思つたし、また、「雪風」が日本海軍の最優秀艦としてニューヨークに行くなどの噂から、復員せず官費旅行ができればと内心期待したが、いずれも敗戦のどさくさに起きた噂話で終わった。

数日後、乗組員の大半に復員命令が降りたが、私には復員命令が降りず苛々していたところ、水雷長より機密書類の焼却するよう命ぜられた。山頂の窪地に運搬し、終日、機密書類一切を焼却した。メラメラと燃え盛る激しい炎を見つめていると、亡くなった戦友の顔が浮かんできて「なぜ、お前だけ助かったのか、俺たちの戦歴をなぜ焼却するのだ」と、怒髪天を衝くごとく迫ってくる炎の勢いに、ただ「済まない」としか言えない。

戦争とは説明のつかない「むごさ」だと思つた。あれほど、米海軍の潜水艦隊から「海の狼」と恐れられていた駆逐艦「雪風」の戦歴の証が、敗戦という二文字で歴史上から抹殺してしまう軍部の暴挙に、ただ、私は漫然と協力し、一日も早い復員を夢見ていた。

特別輸送艦「ゆきかぜ」(海外同胞の引き揚げ船)

終戦から二週間後、「雪風」は第一予備艦に指定され、伊根村岸壁で偽装を解き、潜水母艦「長鯨」とともに舞鶴軍港へ回航した。途中、「雪風」が栗田岬を通過した直後、敷設機雷が爆発し危うく難を逃れる八ブニングがあり此処でも強運の女神に助けられた。

一〇月五日帝国海軍から除籍された「雪風」は舞鶴ドックで武装解除され、主要な兵器を撤去したあとにハウスを仮設し、海外同胞の引き揚げる特別輸送艦「ゆきかぜ」として任務に就いた。私は「雪風」に残留し、復員事務官(甲板)として再度、ご奉公した。

昭和二一年二月から一〇か月間の引揚者数は、軍人軍属三五〇万人一般入三〇万人計六六〇万人が祖国の土を踏むという、正に未曾有の民族大移動が行われた。

引き揚げに携わった艦船は、興安丸、高砂丸(病院船) 駆逐艦六〇隻、海防艦七〇隻に、米国から貸与されたりバ艇とLS T(上陸用舟艇)一〇〇隻であった。「雪風」がこの間に運んだ人数は、一三六〇〇余名でラポウル、ポートモレスビー、バンコック、ゴシチャン、中国葫蘆島五回、沖繩三回などの帰国者らは鹿児島、浦賀、呉、博多、佐世保などに上陸した。引き揚者に、漫画家水木しげる氏や輸送中、赤ちゃんが出産し、艦長が名付け親になって「雪子」と命名。また、我々乗組員も「特別輸送艦雪かぜの歌」作り、乗組員で合唱し、引揚者を慰安す

るなど行った。

終戦すべきは、中国仙頭から陸軍将兵三二五名を引き揚げた際、中国側からサイゴン米二〇俵と野菜缶詰など、トラック一杯の食糧の援助をうけた。理由は、双方の軍事令官が偶然、日本の陸軍士官学校同期の関係から、戦時中は一発の銃弾も撃たず、休戦のまま終戦を迎えた。正に勇者の友情に心をうたれた。

また、台湾の高砂族(日本の軍隊に義勇兵として志願)六〇数名を、最前線のニューギニアのポートモレスビーで引き揚げた際、同年代の隊長から「日本の国体護持は大丈夫か」「天皇陛下は健在ですか」と尋ねられたのには驚いた。最前線で他民族の将兵から占領下の日本の復興と、天皇陛下への気遣いをもらい、いたく感激した。終戦から一年余、連合軍に内密に聞いた短波放送で、日本国民が食糧難で困窮していることを知り蓄えてきたサイゴン米や缶詰、野菜、椰子の実、バナナなどの食糧を多量、船に積み込んでくれた。これからは、戦後の美談として語り継ぎたいと思う。

最も、惨めで不運な引揚者は中国遼寧省葫蘆島からの引き揚げ者ではなからうか。終戦の一週間前、不可侵条約を破棄し怒涛のごとく攻めてきたソ連と八路軍の兵士に、家は焼かれ家財は略奪、子供はやむなく中国人に預ける等、苦難の末、酷暑の満州平野を無蓋車(天井のない貨車)に閉じ込められ、やっとの思いで、「雪風」が待つ葫蘆島の岸壁に着き、乗船手続きの中、突然、現れたソ連兵と八路軍(中国共産党)兵士に、独身の女子が片っ端から徴発されるという非常な行為が白昼行なわれ

た。乗船責任者として抗議をしたが、彼らは、日本軍から受けた暴力の仕返しだと弁明した。余りにも酷い仕打ちに反感をもった。

この事件がきっかけで、一八歳の女子が航海中投身自殺を計った。この痛ましい事件以後、婦女子の帰国者は、汚い服装にザンバラ髪にショートカット、顔は木炭や泥をぬる等汚い服装で乗り組んだ。中には乗船直前、にわか結婚し夫婦を名乗って乗船名簿の訂正をした者も居た。岸壁に横付けする「雪風」を目前に起きた事件に恐怖と不安から脱せない引揚者たちは、乗船後もわれわれを八路軍兵士だと疑い、心を開かず、疑心暗鬼が解けたのは博多入時であった。思えば、この引揚者達は、帰国後も、尚、苦難の道を進まねばならないと思うと、強運の「雪風」にあやかつて、強く生き残つて活躍してほしいと願つた。

胡蘆島に入港した際、偶然、練習船日本丸に乗務員の同郷の西尾利良氏と手旗で交信する機会があつた。彼は高等商船学校を卒業後、初航海で胡蘆島の引き揚げに従事してきたところだと返信してきた。お互いに、今後の検討を祈りあつた。

シンガポールで、陸軍の将兵二〇〇余名を受け取つたところが、二年前、勝ち誇つて見物した、英、欄、豪、の捕虜収容所であつたし、恭しく参拝した昭南神社（伊勢神宮の別宮）は破壊され雑草が生い茂るなど、敗れて因果応報を肝に銘じた。引渡に立ち会つた連合国（英、欄、豪）の将兵らは、思ひのほか勝者としての態度は微塵もなく開放的で自由闊達な振る舞いと

温かい気遣い、それにアイロンの効いた軍服姿に驚き入った。持ち合わせ物とキヤメル煙草に携帯食（ビスケット、チーズ、チョコレート）の詰め合わせ）何処で擦つても点火するマッチなどを友好の証にと呉れたが、到底、私には想像しがたく敗者として屈辱感を痛いほど味わつた。その反面、なぜ、このような連合国軍と国が焦土となるまで戦つてきたのかと、憤懣やる勝たない思ひであつた。

一〇か月間の引き揚げ業務は、私にとつて得難い経験であつた。勇者の友情と同情を禁じ得ない絆、勝者として奢らない開放的な態度、それに苦難を乗り越えていく満州の引揚者などから、多くの事を学び見聞することで、バリバリの軍国主義者に洗脳されてきた呪縛から、徐々に解放されていくのを感じた引き揚げ任務であつた。

戦時賠償艦として「雪風」を中華民国へ引き渡す。

一〇か月間にわたる復員輸送任務を終えた日本海軍の残存艦一三四隻（駆逐艦二三隻、駆逐艇六五）は昭和二十一年一二月三〇日特別保管艦に指定され、翌年五月、東京の芝浦海岸で連合国の査察を受けたのち、抽選で賠償先が決定された。

「雪風」は隣国の中華民国へ引き渡されることが決まつたが、この査察で「雪風」は又しても最優秀にえらばれた。中島先任将校から「本艦を赤穂城明渡し精神に則り、有終の美を飾りたい」の指示のもと、入念に整備した結果、連合国の武官から「敗戦国の船でありながら、是ほど見事に整備された船は見た

ことがない」と賞賛された。

私は、九三式酸素魚雷の引継ぎ専門技官として、上海埠頭で行われる「雪風」の引渡式典に参加することになり、六月二〇日、横須賀、佐世保をへて揚子江にはいり、群がるジャンクを際どく避けながら、七月三日午前一時、上海埠頭に「雪風」は横付けされた。

騒然とした埠頭広場には、中国海軍軍人と一般市民が、敗戦国の駆逐艦を一目見ようと門前市をなしていた。軍楽隊が演奏する中、上海市長（纏足のクーニヤン三人を連れて）に来賓、海軍将校らが続々と船に乗り込んできて艦内を隈なく見学した。私は、腸が煮え繰り返す思いで案内役をつとめた。また、式典前に行った中華民国海軍の将兵一〇数名に九三式酸素魚雷の引継ぎをしたときも同じ思いをさせられ、敗戦の憂き目をつくづく感じた。

話が変わって、私は中国への任務を終えた後、駆逐艦「春日」と「桐」をソ連へ引き継いだ際、先勝国のソ連兵と中国兵の心構えの違いを知った。特に、ソ連は共産主義国で、階級や搾取のない社会だと学んできたが、少し違っているように思った。

船がナオト力湾口で待機していると、飛行機エンジンを轟かせ近づいてきた快速艇から乗り込んで来たソ連の将校は、アイロンの効いた軍服にピカピカの勲章をぶら下げ、立派な長靴をはき、高慢な態度で水先案内をした。一方、引継ぎに立ち会った兵士はというと汗と油に塗れた汚い服装で、靴の破れ目から親指がはみ出る貧相さであったが、いざ、引継ぎとなると鋭い

質問に、真剣にメモをとる勤勉さであった。竹に差した短い鉛筆を口で嘗めながら、古新聞の余白にギッシリと引継ぎ事項を書き込む粘りは、ツンドラ地帯で遅く育った強さのように感じた。

さて、上海埠頭での「雪風」引渡式典は、中国軍楽隊の吹奏するなか厳粛に行われた。

マストから静かに降ろされていく日の丸の旗を仰ぎ見ながら、「雪風」とともに戦ってきた日々が去来し、同時に、この船に乗り合わせた幸運と誇りに感極まる思いであった。私たちは「雪風」よ永遠であれと祈りながら、最後の別れを告げた。

占領軍の最高指揮官マッカーサー元帥の指令で、乗組員は四八時間内に引継ぎを完了し米国のリバ艇で帰国する予定であったが、案の定、リバ艇に移乗した途端、「発電機が起動せず電気が点かない」の信号に、電気技官が「雪風」に戻って点灯させたが、皆一抹の不安を抱きながら帰国の途についた。

マストに翩翩とひるがえる青天白日旗を掲げた艦影が、徐々に、遠ざかっていくのを敵艦上から見送る矛盾に、複雑な思いであった。

上海埠頭を離れ、狭くて上下の流れが激しい揚子江は、衝突を巧みにかわすジャンク（水上生活船）の水面下に死体が浮流する程の大河であった。太平洋に出ると、艦長より艦内見学が許可された。初めて敵艦の心臓部である艦橋を見たが、ともかく、一切がレーダーで管理された科学兵器の数々に目を見張り驚愕した。丁度、リバ艇が濃霧のバシー海峡を通過中であつた

が、日本海軍の場合は、自艦の位置を警笛とドラで騒々しく他艦に知らせ回避したが、艇はレーダーで自他の位置、方向を捉えて警報する科学的手法で回避した。

海兵団卒業時、担任の教官から「これからの戦争は科学戦だ」と教えられたが、その現実が米軍によって多用されていた。「井戸の中の蛙大海を知らず」の例え通り、我々は、日露戦争以来の大艦巨砲主義を信奉し、精神力で敵と戦ってきた愚か者であることを、まざまざと見せつけられた敵のリバ艇見学であった。

振り返って、奇跡の駆逐艦「雪風」に乗り合わせた事が、私の運命を決定づけたと思う。十五歳で海軍に志願し、中堅幹部教育をうけ幾多の海戦に参加した。中でも、戦艦「大和」「武蔵」幻の空母「信濃」とともに戦い、沈没に立ち会い、生存者を救助し、最後に沖繩水上特攻として出陣したが幸運にも、生き残った唯一の浮沈艦である。戦後も海外同胞の引き揚げに携わり、多くの復員者を内地へ送還した。戦後は戦時賠償艦として隣国で友好国の中華民国に引き渡されて有終の美を飾るなど、正に誇り高い戦歴と同時に戦後の混沌とした世相をいかに生き抜くかを、引き揚げ船と賠償艦の引渡しを通じて会得したことは感無量で望外の喜びである。ひたすら駆逐艦「雪風」の武運を祈るのみである。

青天白日旗を掲げた「雪風」は、名も「丹陽」タイヤン（赤い太陽）と命名され中華民国海軍の旗艦として活躍したことを付記し完結する。

編集者注

『15才の海軍特別年少兵』は長文であるため、筆者である西崎信夫さんに抜粋をしていただいた部分を掲載させていただきました。

市民の戦争体験記（三）

2012年（平成24年）3月

編集 非核・平和をすすめる西東京市民の会
発行 西東京市 生活文化スポーツ部 協働コミュニティ課
住所：〒202-8555 西東京市中町1丁目5番1号
電話：042-438-4046（直通）
FAX：042-438-2021（共用）
E-mail：kyoudou@city.nishitokyo.lg.jp